子どものスポーツとしてのフラッグフットボール
Flag football as a child sport

山本明秀
Akihide Yamamoto

帝京大学医療技術学部スポーツ医療学科
Faculty of Medical Technology, Teikyo University, 359 Otsuka, Hachioji, Tokyo, Japan

Abstract

The American football population in japan is declining. However , American football – based flag football has become more popular in recent years. A feature of flag football is that contact play is prohibited. Therefore , it can be safely performed as a sport for children. There are few major injuries and the whole team can play together. People who have experienced flag football often play American football in high school or college. If the number of children who play flag football increases and they start to play American football when they grow up, we will be happy that Japanese American football will thrive.

キーワード：アメリカンフットボール、フラッグフットボール
Keywords: American football, Flag football

1.　はじめに

この原稿を執筆している同じ時期に、国内では 2019 年 9 月に開幕したラグビーワールドカップで大いに盛り上がっている。開幕前は、ラグビー色は街中でもあまり感じることが無かったが、ブレイブ・ブロッサムズ（日本代表の愛称）の大活躍もあり、ラグビーに興味を持っていなかった層も取り込み盛り上がりを見せている。

筆者は、同じような楕円のボールを用いる競技であるアメリカンフットボールに 1989 年から関わっているが、ここまで大きな盛り上がりを感じた事は無い。

競技に関わっていると、マイナースポーツであるということを忘れてしまいがちであるが、現実には競技スポーツ人口をまとめた文献にも競技名すら載らないのが実情である [1)]。

表－１に示したものは日本アメリカンフットボール連盟への登録者数である。

２万人ほどいた登録者数が１万４千人前後へと登録者数が減少し、競技人口が縮小してしまっている。競技特性上、アメリカンフットボール経験者などが顧問に就かなければ部活動として成立しなかったり、接触により大きな怪我をしてしまう危険性なども選手として敬遠される一因ではないだろうか。

そんな状況の中、アメリカンフットボールと同じ理念の下、コンタクトの要素を取り除き、安全なフットボールとして広い世代に親しまれるようになった競技としてフラッグフットボールがある。

本稿では、子どものスポーツとしてのフラッグフット

表－１　アメリカンフットボール連盟登録者数

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
高等学校（人）	4189	4114	4208	4186	3941	3606	3845	3782	3595
大学（人）	9798	9806	9745	9554	7192	7567	7783	7899	7955
社会人（人）	4978	4739	4676	4154	2711	2602	2575	2597	2528
計（人）	18965	18659	18629	17894	13844	13775	14203	14278	14078

ボールについて着目し、その競技上の特色などについてまとめてみたい。

2. アメリカンフットボールとの相違

フラッグフットボールとアメリカンフットボールとの違いで最も大きなものは、当たり（接触）が無いということである。ルールブック上ではオフェンス側の冒頭に「選手は相手と接触をしないように努めねばならず、接触行為並びに接触につながる行為をしてはならない。攻撃側選手は、守備側選手を避けて動かなければならない。（中学生以上編では：攻撃側選手は守備側選手の進路を妨害してはならない。）」とあり、ディフェンス側の冒頭でも「選手は相手と接触をしないように努めねばならず、接触行為並びに接触につながる行為をしてはならない。守備側選手は、スクリーンブロックをしている攻撃側選手を避けて動かなければならない（2行目は小学生編のみに記載）。」と明記されており、しかも赤枠で囲ってある[2), 3)]。接触行為に関しては厳しく禁止されているため、ヘルメットやショルダーパッドなどの装具は不要となる。また、前線で当たり合うラインのポジションが必要なくなるため、アメリカンフットボールでは11人対11人で行われるものが、5人対5人でのチーム構成となる。細かいルールなどについては今回は省くこととするが、人数が少ない分、フィールドの大きさも小さくなっている。

選手は装具の代わりに腰回りにフラッグを装着し（図－1～3）、タックルが無い分、ボールキャリアを止めるためにはそのフラッグを引き抜き、それによりタックルが成立したとみなされる。ただし、両腕を広げて両サイドのフラッグを狙いに行くとタックルに入るような姿勢になり、身体接触の危険が生じるので注意が必要となる[5)]。

シャツはパンツの中に入れ、腰の両サイドにフラッグを付ける。

フラッグフットボールとアメリカンフットボールで共通している部分は、4回の攻撃権が与えられており、規定の距離を進めなかった場合には攻守交替するという点と、「ハドル」と言われる作戦会議を毎回プレイの前にフィールド上で行うということである。他の一般的なボールゲームと異なりプレイが1回ごとに止まるため、時間は短いが各自の役割分担を確認したり、気持ちを切り替えることも可能となる。

図－1　フラッグの例[4)]

図－2　筆者が使用していた短冊形フラッグ

図－3　着用例[4)]

3.　フラッグフットボールでの傷害

子どもがプレイするフラッグフットボールでの傷害の統計を探したのだが見当たらず、Collins P.K が行ったアメリカの大学での女子選手における受傷内容に対する調査では、指が39%、膝が16%、足首が8%であり、指の傷害が最も多くなっていた[6)]。また、正式な調査ではないのだが、小学生時代にフラッグフットボールのクラブチームに参加していた大学１年生７名に話を聞いたところ、当時の傷害の経験としては突き指が２名、指の骨折が２名、手首の骨折が１名であり、指の傷害が最も多かった。原因としては、ボールをキャッチする際に受傷していることが多く、手首の骨折に関してはフラッグを取りに行って相手の身体に接触してしまい受傷したとのことであった。

パスキャッチの際に突き指や脱臼などを起こす場面には遭遇した経験があるが、筆者自身はフラッグを取りに行った際に、相手のユニフォームに指が引っかかってしまったり、相手の身体に手先が当たり突き指をしたこともあった。

他のボールゲームでは建前上は身体接触禁止を謳っていても現実的には当たりが許されている競技もあるが、フラッグフットボールの場合は厳しく反則を取られてしまうこともあり、接触による大きな傷害は起こりづらくなっている。

4.　フラッグフットボールの普及

日本フラッグフットボール協会のホームページ上では、指導普及用の資料（小学生児童向けのマンガによる指導書や教員向けの資料など）が各種ダウンロードできるようになっている[7)]。

さらに、小学校学習指導要解説・体育編のゴール型ゲームとして、2008年より掲載されるようになったということは、普及にあたって非常に大きなできごとと考えられる[8), 9)]。メジャーなスポーツであるバスケットボールやサッカーなどと並列で記されるようになったのである。

競技スポーツとしてのフラッグフットボールと教材として行われるフラッグフットボールでは、若干内容が異なるかもしれないが、先に挙げた資料などを活用して、フラッグフットボールの経験が無い先生方による授業も行われており[10)]、未経験の児童たちが学校教育の中でフラッグフットボールに触れる機会が増えてきている。

表－2　フラッグフットボール大会登録選手数

年度	2011	2012	2013	2014	2015
小学生（人）	197	238	296	265	1238
中学生（人）	129	167	283	211	592
小中計（人）	326	405	579	476	1830

表－２に示したものは、協会から提供された大会への年度ごとの登録選手数である。大会の規模にもよって登録者も変わることと、競技の性格上、大会に出場しなければ登録する必要もないため、正確に競技人口を表すものでは無いが、年々登録者は増加傾向にある。話を聞いたフラッグフットボール経験者の男性においては４人全員が高校・大学でアメリカンフットボール部に所属していた。小学生時代に体育の授業でフラッグフットボールに触れた児童たちが将来進学先でアメリカンフットボールを選択してもらえるのは、アメリカンフットボールに関わる者として嬉しい限りである。

彼らが安心して選択できるよう、環境整備を進めて行かなければならない。

5.　謝辞

本稿の執筆にあたり、登録人数などを開示していただきました、公益財団法人日本アメリカンフットボール協会、公益財団法人日本フラッグフットボール協会の事務局の方々に深謝いたします。

また、FFFC キディ・フロンティアーズ卒業生の方々などにもフラッグフットボールの現状についてご意見を頂きました。ありがとうございました。

6. 参考文献

1）渡邉一利編：スポーツ白書 2017、第一版、笹川スポーツ財団、東京、85-86、2017.
2）NFL FLAG 大会規則 2019 年度版　小学生編．公益財団法人日本フラッグフットボール協会、2019.
3）NFL FLAG 大会規則 2019 年度版　中学生以上編．公益財団法人日本フラッグフットボール協会、2019.
4）公益財団法人日本フラッグフットボール協会．ルール・用具．https://www.japanflag.org/flag/rule（最終閲覧日 : 2019 年 10 月 12 日）
5）後藤完夫 : フラッグフットボール入門、第一版第一刷、タッチダウン株式会社、東京、8-78、2009
6）Collins P.K. : Injury patterns in women's intramural flag football. American Journal of Sports Medicine 15(3): 238-242, 1987
7）公益財団法人日本フラッグフットボール協会．テキストプレゼント．https://www.japanflag.org/book（最終閲覧日 : 2019 年 10 月 12 日）
8）文部科学省 : 小学校学習指導要領解説　体育編、第一版、株式会社東洋館出版社、東京、51-75、2008
9）文部科学省 : 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　体育編、第一版、株式会社東洋館出版社、東京、96-145、2018
10）フラッグフットボールサポートガイド、公益財団法人日本フラッグフットボール協会、東京、2016